

2018 年 4 月 15 日（日）「キリスト者の幸せ」

マタイ 16:21-23

21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

【序論】

私たち人間は宗教を持つ生き物です。なぜ動物界の中で人間だけが宗教を持つのか。この問いにはまず、人間が「知性を持つ存在であるから」と答えられるかも知れません。また、「人格的交流を求める霊的存在であるから」とも言えます。より聖書的に言えば、「人間は神のかたちに造られているがゆえに、神との交流を求める」という回答になるでしょうか。

このように、知性、霊を持ち、見えない存在への畏れを抱く人間は、災害など、人の手の及ばない事象が起きた時、神の怒りの結果だと考えました。そして、神の怒りをなだめるために供え物や生贄を捧げるのが宗教の起源だと一般的には言われています。

しかし、17 世紀頃から科学が発達し始め、それまでに分からなかった様々な自然現象の原因が解明されていきました。ガリレオは「地球は太陽の周りを回っている」と主張し、18 世紀にはベンジャミン・フランクリンによって雷の正体は電気であることが解明されました。19 世紀にはコッホによって病気の原因が細菌にあることが突き止められ、ダーウィンの進化論は宗教の権威に決定的な打撃を与えました。

しかし、そのような時代を経ても尚、究極的な問題が残ります。人間にとって幸せとは何であるか、人間は何のために生まれてくるのか、愛とは何か、罪とは何か、真理とは何か、なぜ苦しみがあるのか、人間は死んだ後どうなるのか……。これらの問いに対して、科学や医学は答えを出すことができません。これらの問いに答えていくのが宗教であり、その役割は尚も健在です。この中で「幸せ」という事柄に注目しますと、それが「不自由や不満もなく、心が満ち足りていること」であるならば、その人が何を基準として「幸せ」と感じるかが問題となります。とりわけ、今日の箇所では主イエスとペテロの持つ「幸せ」の基準が大きく異なるように思われるのです。

【本論】

本論 1. 受難予告

その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。(16:21)

文脈では、今日の箇所はペテロの信仰告白の直後に置かれています。至高の信仰告白をし、主イエスに喜ばれ、特権を約束されたペテロ。主はここで弟子たちの意表を突く予告を始めていかれる。もう間もなく、ご自分はユダヤ教の指導者たちの手によって苦しめられ、殺されると言うのです。ここでのポイントは明らかに受難です。復活も重要ですが、ここでは受難への付随事項のように言われている。主はなぜこのタイミングで受難の予告をなさったのか。21節の内容を検証しつつ捉えてまいりましょう。

まず、「**イエス・キリスト**」という表現が気になります。これは私たちにとって聞き慣れた呼称ですが、これまでにマタイが「イエス」「イエス」と書いてきたことを考えると、どこか不自然にも感じられる。この部分を「イエス」としている訳もありますが、最も古い写本では「イエス・キリスト」とされています(マルコとルカでは「人の子」)。マタイは主イエスの職務を強調しているのでしょう。キリスト、即ち「油注がれた者」として主は苦しまなくてはならない。

主イエスを苦しめる人々の総括として「**長老、祭司長、律法学者**」が登場しますが、これはユダヤ教最高議会を構成していたメンバーでありますから、神の民のリーダーがメシヤを殺すという、とんでもない暴挙が語られているのです。「イエスはキリストであるか」という問題が審議され、否決され、かえって冒瀆罪で罰せられる。ナザレのイエスが真にキリストであったとするならば、これは取り返しのつかない誤審ということになるでしょう。

主イエスは「エルサレムへ行く」と宣言しておられます。これは、苦しみに遭うことを知っていながらそこへ行くということ。主イエスにとって、これは決して「幸せ」を選択することとは言えません。普通の人なら、敢えて不幸を選択する愚かな行動に映ります。しかし、主イエスはこの選択を不幸だとは思っておられない。自分が苦しみ、殺されることによって、多くの人が罪から贖われるという神のご計画に基づいて、これを全うしようと決心しておられたのです。主イエスの死は単なる一人の人間の死ではなかった。神が人類を愛されるがゆえに、多くの人の罪を被り、神の刑罰を一身に引き受け、その代わりに罪の赦しを与えるという「身代わりの死」として、ご自分の使命を認識し

ておられました。それゆえ、主イエスにとっての「幸せ」とは、肉体的苦痛や、すべての名誉が剥奪されること、屈辱の死を味わうことを超えて、神の御旨に従うこと、そして多くの人が救われることにあったのです。愛と従順によって、究極の不幸は究極の幸せに飲み込まれてしまう。それが主イエスにとっての「幸せ」だったのです。

本論 2. ペテロによる妨げ

するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」(16:22)

主イエスから受難の予告を告げられた弟子たちは動揺したことでしょう。なぜなら、師に降りかかる災難は、弟子たちにも及ぶ可能性があるからです。私たちにはあまりこういう経験がないかも知れませんが、誰かに追随することが自分の身に災いを招くということがある。内村鑑三は「不敬事件」の後、それまで指導してきた学生たちからも非国民と呼ばれ、自宅に石を投げつけられ、窓ガラスを割られました。彼に付き従う妻は、内村と共に苦しんだのですが、これはまさに受難を共にすることを意味したでしょう。

主イエスの弟子たちは、この不吉な予告を聞いて、幾つかのことを予感したと思われる。第一に、もしそんなことになってしまったら、主イエスご自身はメシヤとしての職務を全うできずに終わるばかりか、「やはりあいつはメシヤではなかったのだ」と語り継がれるだろう。第二に、彼に付き従ってきた自分たちの名誉も剥奪されるだろう。第三に、主イエスが殺されるのであれば、弟子たちも命を狙われる立場に立たされるに違いない。このような不安が心に渦巻いてくる。その不安を払拭するかのよう、ペテロが声を挙げました。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません」。

彼は自分にできる精一杯の声かけをしました。「いさめた」(ἐπιτιμᾶν)とは、「非難する」「間違いを指摘する」といった意味を持つ言葉です。「ちょっとちょっと、先生、何てことを言い出すんですか！ダメじゃありませんか。そんな気弱なことでどうします。私たちがあなたをお守りするんじゃないですか」というペテロの気概を感じます。彼はあくまでも善意と愛から語りました。彼の中に「メシヤが死ぬ」という概念はなかった。メシヤは死んではいけなかったのです。力強く生き抜き、この恥辱にまみれたユダヤ民族をローマ帝国の圧政から救い出さなくてはならない。そのビジョンを何としても果たしてもらわなくてはならなかったのです。

さて、ここでペテロにとっての「幸せ」の基準というものを考えてみましょう。彼にとっての幸せとは、主イエスと共に理想のイスラエル王国を立て上げることでした。か

つて隆盛を誇ったダビデ時代のイスラエルを思わせる、ローマ帝国をひっくり返すような勢力を持つ「神の国」を打ち立て、自分は右大臣として着座することを夢見ていたかも知れません。ユダヤ民族全体が名誉を取り戻し、神の民が世界を支配する日を待ち望んでいたのです。彼（あるいは十二弟子）にとっての「幸せ」とは、命を失うことではなく、主イエスと共に世を治めることでした。そこにはもちろん「苦しむ」という要素は入っていません。彼らが求めていたのは「人間的繁栄」です。これが普通の人の感覚ではないでしょうか。

人は何のために宗教を持つか。幸せになりたいからです。無病息災を祈って一年をスタートするのが普通の人のあり方でしょう。しかし、主イエスの言う「幸せ」とはそういうものではなかった。自分の思いを超えて、父なる神様の御旨が成るということこそが「本当の幸せ」だったのです。

本論 3. 贖いの道を壊そうとするサタンを退けるイエス

しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」(16:23)

主イエスは、ペテロの善意から出た言葉を撥ね除けます。しかも「サタン」とまで呼ぶ。ものすごい剣幕に、弟子たちは言葉を失ったことでしょう。主はなぜこれほどまでにお怒りになったか。ここでの主の言葉は普通の人間の感覚をもってしては理解できません。

『新改訳 2017』では、「わたしの邪魔をするものだ」が「わたしをつまずかせるものだ」と訳し直されています。ここで使用されている言葉 (οκάνδαλον) は「罨」が原義であり、人を欺いて足元をすくうような感覚で使われます。ペテロの言葉がなぜ主イエスにとって「罨」となったか。それは、主イエスの心の中にある葛藤を突つく内容だったからです。主ご自身は父なる神様の御旨を知っておられた。それに従い、苦悩と十字架の死を全うし、多くの人のための贖いの代価となるべき使命を自覚しておられました。そして、そこにこそ、ご自分にとっても全人類にとっても、最大の「幸せ」があることを認識しておられました。

しかし、一方で主イエスの心の中にはどうしてもその苦しみを味わいたくない思いがあったのです。死は恐ろしいことでした。神の子が冒瀆罪で裁かれるということは屈辱の極みでした。鞭打ち刑がどれほど残酷なものであるかを知っておられました。十字架の苦しみは言語に絶するものでした。そして、何よりも、愛し愛されている父なる神様との関係が断ち切られるという、霊的暗黒を恐れておられました。誰が主イエスの苦しみを真に理解できるのでしょうか。主イエスは逃げ出したかったと思います。悪魔は何度

囁いたことか。「私と一緒に世界を治めようではないか。そんな苦しみなど全く必要ないんだよ」と。

ペテロの言葉の背後には悪魔がいました。善意から出たペテロの言葉は、悪魔によって乗っ取られていたのです。悪魔が彼に発言させたのです。揺れ動く主イエスの心に甘い囁きとなって迫ってきた。主はそれを払い除けました。激しく手を振りほどくかのように、ペテロの言葉を地面に叩きつけました。

「神のこと」「人のこと」という表現があります。「神のこと」とは、神がお立てになった奇しい救いのご計画。つまり、キリストが苦難を経て全うしなくてはならないことです。「人のこと」とは、人間の思いを基準に物事を考えること。つまり、苦しみのない「幸せ」を願うことです。主イエスの究極の幸せは神に従うことでした。ペテロが言っていることは、本質的に「贖いの御業は全うできなくても結構です」という意味になるでしょう。言い換えれば、「私の罪は赦されなくても構いません」「全人類の罪などそのまま神に審かれればいいのです」ということになります。

この部分を学んでおりまして、思い浮かんだ箇所がありました。それは、十字架に架かる前夜、主イエスが弟子たちの足を洗い始めた時の出来事です。主が手ぬぐいを取ってペテロの足を洗おうとすると、師にこのような「しもべ」としての接し方をされるのに恐縮の思いを抱いたペテロは、「**決して私の足をお洗いにならないでください**」と拒否しました（ヨハネ 13:8a）。これもまた、ペテロの善意から出た言葉です。師に仕えられるなどとんでもないこと。無礼にも程があると思ったのです。しかし、それに対して主は言われました。「**もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません**」（ヨハネ 13:8b）。ペテロは主に仕えていただかなくてはならなかった。罪を拭いていただかなくてはならなかった。主の献身を 100%受け止めなくてはならなかったのです。

【結論】

私たちは主イエスの献身を真正面から受け止めているでしょうか。主に仕えていただくことを喜んでいるでしょうか。十字架に架かり給う主イエスの姿を見て、自分の罪が既にそこで審かれ、罪の赦しが宣言されていることを確信していますか。私たちの幸せの基準は、この世にはありません。罪の赦しの福音に生きる場所にあるのです。この道を歩むためには、他の如何なるものをも犠牲にしなくてはならないかも知れません。この世の宝を捨て去ることが求められるでしょう。しかし、主はこの道を信じて歩いてみないかと問いかけておられます。その先に究極の「幸せ」があると。永遠の神の国でしか見るこのできない「幸せ」が必ずあると約束しておられるのです。

【祈り】

全人類、全歴史に対して、良いご計画を持っておられる神よ。主イエスの喜びは、あなたの御旨に従うことでした。そのためには、ご自分の苦しみをも甘受されました。それがどんなに凄まじい苦痛と屈辱を味わうことであつたとしても。ここに「十字架を負う」という事柄の意味があります。私たちにもその道を歩ませてください。主イエスに従うところにこそ、真の幸せがあることを信じます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人類の幸せを願い、御子イエスに苦しむことを求め給うた、父なる神の愛。
御父に従うことこそを喜びとし、ご自身の名誉も地上的楽しみも、一切をかなぐり捨て給うた、主イエス・キリストの恵み。
主の御足の跡に従い、己が十字架を負って生きる道を選択させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。